

宣教師によるキリシタン統制文書群の収集と整理

—マレガ目録の分析から—

高見 純

はじめに

本稿では、バチカン図書館所蔵マレガ資料群のなかに確認されるマリオ・マレガ神父の資料整理に関わる記録を分析し、資料収集者による整理と管理の在り方を検討する。それによって、資料群の構造の歴史的解明を目指す。あわせて、布教地研究を実践する宣教師と、本国イタリアとの関係性を示す一例として本資料群を捉えることによって、宣教師の活動を巡る一側面を描写したい。

マレガ資料全体の一部を占めるバチカン図書館所蔵の膨大なマレガ資料群は、白杵藩宗門方の資料を中心に構成され、近世日本のキリスト教統制の全容解明に向けて、多大なる貢献が期待されている。たしかに、古文書史料に記された豊かな内容が提供する歴史的な証言の有用性に疑いの余地はない。ただし、この資料群が、20世紀前半に1人のキリスト教宣教師によって収集、整理、管理され、さらには日本から海を渡ってバチカンへと送られた経緯を有することもまた忘れるべきではない。文書の作成と管理が行われた同時代における資料群の秩序と構成が、そのまま発見されて今に至るわけではないのである。したがって、個々の文書を検討する前段階として、それら文書が集まったところの資料群としての全体像を検討し、構造を解明する段階が不可欠であり、それによって初めて、資料群が有する射程と限界を正確に理解することが可能になるはずである¹⁾。

実際、A1からA26におよぶ資料群には、1万点におよぶ近世文書に加え、マレガ自身による4000点ものドキュメントも存在し、紙片メモや、原稿、種々の研究ノートの他に、マレガによる史料への直接的な書き込みも確認される²⁾。

そのなかで、とりわけ注目されるのが手帳サイズの目録（以後、マレガ目録と略記）である。マレガが資料群の整理を行うさいに、中心的に用いたと考えられる。

したがって、本稿の第一の目的として、この目録を中心に据え、関連するマレガ・ドキュメントも随時参照しながら分析を進めることで、マレガによる資料群の収集、整理、管理について理解を試みる。それによって、資料群への取組みの具体的な諸段階を検討し、現存する資料群の構造理解の一助としたい。

また、マレガが行ったような現地文物の収集や研究自体はけっして特殊なことではなく、世界中の数多くの宣教師たちによって、布教地への理解と適応³⁾を目指すなかで行われてきた。マレガによる活動もその一事例と位置付けられるが、日本についての膨大なキリスト教統制資料群の収集は他に類を見ないとも考えられる。そして、先述の通り、本資料群には資料収集者による記録が多く残っており、膨大な資料群の整理と活用の様相に近づくことが可能なのである。

そこで、本稿の第二の目的として、宣教師による文書資料の収集と活用としての側面から、布教地研究と理解を進めた宣教師の活動を巡る在り方に一例を加えたい。資料群中における個別文書の所在と行方を検討するなかで、宣教師としてのマレガの活動にもたらした文書の収集と活用の意義について考察する。

1. マレガ目録

(1) 外形

①外形と対象範囲

マレガ目録は、A16というまとまりのなかに、A16.4.4.1.1という整理番号を与えられて保存されている。寸法がおおよそ縦20×横15cmの、厚手のノートである（写真1）。ノートの表紙には、「日本での迫害に関する文書の目録 マレガ神父 1938年」と記されている⁴⁾。1938（昭和13）年前後に目録が作成された可能性、およびマレガが資料群についてキリシタン迫害を内容とすることを認識していたことがわかる。

バチカン図書館での資料群の再発見時には、目録は封筒に入れられていた。

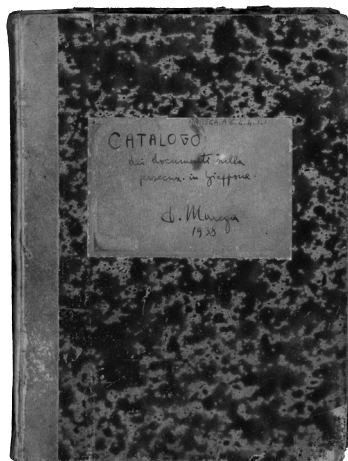


写真1 マレガ目録 (A16.4.4.1.1)
©2022 Biblioteca
Apostolica Vaticana

封筒には、目録についての簡単な説明が付されており、それによれば、目録に記録されたのは「未加工木製長持に収められた文書群の番号」であった。⁵⁾長持は、1953年にA1からA21の資料群をバチカンに送付する際に使用された。⁶⁾同年8月、東京にいた教皇公使秘書は、のちに教皇パウルス6世となる国務長官ジョヴァンニ・バッティスタ・モンティーンに宛てて資料群の送付を報告した。報告では、資料群が収められた「二つの大きな箱と一つの中くらい」の箱がイタリアへ運ばれたという。⁷⁾大きな箱の一つは上述の長持であり、二つ目の鉄板の貼られた大箱には、まだこれから目録化

が必要な文書が収められていた。そして、中くらいの箱には、マレガが著作のために使用した資料が収められていた。⁸⁾

これらの証言通りに考えれば、マレガ目録は、一つ目の長持のみを対象としたように思えるが、そうではない。中くらいの箱に収められた文書も、どれも番号付けされており、もともとは長持に入っていた文書のまとまりから研究のために抜き取られたものである。したがって、目録は、1953年時には「未加工木製長持」と中くらいの箱に入れられ、マレガがある時点で番号付けをしたすべての資料を対象範囲とすると考えてよいだろう。⁹⁾

②構成

ノートは、見開き1頁として157頁ある。1頁から131頁まで使用されており、その後の132頁から157頁までは書き込みがない。ただし、文書目録が開始するのは4頁からであり、最初の3頁には、種々の情報が所狭しと記されている。

たとえば、1頁目の右側には、「寺の絵踏」、「庄屋の絵踏」など、文書の種類を示す主題が並ぶ。マレガの関心を指し示すものとしても興味深いのが、該当する資料番号を記すことで目録の索引のような役割を果たしたと考えられる。

2頁目にも索引が続き、府内や竹田といった臼杵藩以外の地域の宗門改帳についてのものもある¹⁰⁾。また、資料の入手経緯、出所や範囲、古文書の解説や文書内容に関わる情報、日本史の知識メモなどが散見される¹¹⁾。

最後に、3頁目では、左側には翻訳すべき重要資料が一覧的に記され、その多くが取消線によって消されていることから、翻訳作業に活用したメモであると考えられる。また、右側には、出版についての情報とともに、イタリアや日本の各所への資料送付に関わる情報が記載されている。

(2) 目録からみる資料群の構成

①記載方法

では、目録部分の基本的な記述にはどのような方法がとられたか。番号付けされた資料が目録の対象範囲であることはすでに述べたが、目録記述の全頁で唯一の統一的なルールは、この資料番号（以後、マレガ番号と表記）が頁左側に記載されたことである。マレガ番号がノート冒頭の索引にも活用されたことはすでに述べたが、実際の資料と紐付けるためのもっとも基本的な記号がマレガ番号であった。

したがって、目録記述はマレガ番号を基準として、各番号が示す資料についての内容や情報が記載される。ただし、目録全体に共通する記載方法は見当たらない。たとえば、前半は見開き1頁分の幅を使って1つのマレガ番号について記述されているが、後半の111頁からは、左右の頁を分けて別々に使用している。

内容や情報の記述も箇所によって異なる。たとえば、目録の冒頭は「寺の絵踏」に関する資料が続く。その際には、表1にあるように、左頁の左端からマレガ番号、資料年次、ローマ字と漢字での寺名、右頁の左から参照マレガ番号、宗派や地名などの情報、現在の地名が整理されて記録されている。一方、その後には登場する「棄教者」に関する資料群はこれと異なり、マレガ番号の横には、年次、棄教者数、家族数、地名、寺名等、現在の地名が並ぶ。その他、文書の内容要約や資料情報が記述される箇所などもあり、各資料の内容に即した形で柔軟に構成された（写真2）。

表1 目録の記載例 (Efumi al Terà : 寺での絵踏)

左ページ				右ページ		
マレガ番号	年次	寺名 (ローマ字)	寺名	参照マレガ 番号	寺名・宗派・地名・そ の他	現在の地名
1	1834	Ren-shio-ji	蓮照寺	675	最初の月の23人のすべて。真宗	津久見
2		Ko-Koku-ji	光國寺	685	浄土真宗 (本願寺派)	小佐井
3	1838	Ko-ren-ji	光蓮寺	664	真宗 東	白杵
4	1838	Jio-ghen-ji	浄元寺	666	?	Usuki
5	1838	Zen-shin-ji	善正寺	654	Usuki	白杵
6	1838	Ko-rin-ji	香林寺	671	Entro 光林寺	由布川
7	1838	Shio-ko-ji	正光寺	695	Shin.	田野
8	1838	Jio-ren-ji	乗蓮寺	699	Shin.	百枝

出典) A16.4.4.1.1, 4 頁の上部。

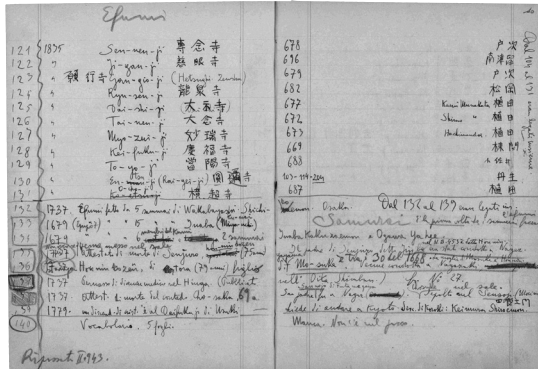


写真2 マレガ目録の記載例 (A16.4.4.1.1)

©2022 Biblioteca Apostolica Vaticana

また、目録では複数の色のペンや鉛筆が用いられ、番号に印を付けたり、加筆が行われたことがわかる。加筆部分の正確な特定は困難だが、出版や送付情報、資料整理や資料のまとめり、研究用と考えられるメモなども確認される。

②内容

つぎに、目録の内容について全体を俯瞰してみたい。マレガが番号を付与して整理と把握を試みた資料群の全体像を概観することができる。

表2では、マレガ番号を基準に、目録に記載された資料内容を一覧化した。目録では、共通の主題の資料が続く場合には、頁上部などに見出しが書かれることがある。表では、これらを「内容項目」欄に記載した。一方で、共通する

表2 マレガ目録の内容構成のイメージ

番 号	内容項目	備 考
1-131	Efumi al Tera (寺での絵踏)	一部、Efumi dei samurai (侍の絵踏)
132-139	Samurai	"Efumi Samurai"
140		"vocabolario"
141		出生
142-158	Efumi al Tera (寺での絵踏)	
159-171		死亡など
172-174		"Efumi"
175-196		死亡、出生、寺関係(戒名、系図)など
197-221	Efumi al Tera (寺での絵踏)	
222-225		帰還、死亡など
226-298	Apostati (棄教者)	1635年、人数、家族数、地名、寺院名を記載。 249は庄屋の資料
299-325		侍の絵踏、Shumon aratame cho (宗門改帳)、 死亡、出生、庄屋など
326-340	Apostati (棄教者)	1635年、市尾村。庄屋の書状
341-347		Apostati (棄教者)、名塚村
348-384	Efumi	
385-420		宗門改帳、書状など
421-440	Efumi	
441-460	Frammenti di Shumon Aratame Cho 断片	
461-480	Shumon Aratame cho	
481-566	Efumi	
567-631	Efumi Samurai	紐で一まとめに括られていた資料群と注記
632-652	Atti di nascita (出生届)	一まとまりの資料群と注記
653-668	Efumi alle Pagode (寺での 絵踏)	一まとまりの資料群と注記
669-707	Efumi dei Bonzi (坊主)	
708-734	Shumon Aratame cho (frammenti 断片) /Efumi del popolo (民衆の絵踏)	"importante, servira di mostrare che l'esame sulla religione (inquisiz.) si faceva ogni mese" ([「重要。宗門改が毎月行われていたことを示す のに必要」])と注記

735-740	Documenti sui prigionieri 囚人関係	
741-810		囚人関係 (lettera 〈書状〉、Registro 〈帳面〉、Lista 〈リスト〉、Oboe 〈覚〉 など)
811-1000 M1-M89	Ruizoku	823、824、833、834、889、890、937、938、M27、M28、M29、M30、M49、M50は「本人」。それ以外は「転び」
M90-M200	五人組	1646年
M201-M220		宗門改、寺での絵踏、死亡 (府内)、覚など
M221-M266	Efumi	宗門改帳 (Registro Shumon arat. dei samurai 〈M221-M247〉、Shumon aratame cho 1838 Frammenti 〈M248-M263〉、Shumon aratame cho 1845、1838、1791 appendice 〈M264-266〉)
M267-M276		日記、侍の家内人数、カタログなど
M277-M321	Censo 人数書	M281-M282 (1727)、M283-M304 (1733)、M305-M321 (1833)
M322-M330		書状、庄屋の家族の踏絵など
M330-M331	Ruizoku	引越、婚姻、剃髪。以下に連続する一連の「Ruizoku」の項目に共通して、内容がキリシタンの子孫に限らないことの注記や、各資料に対して本人、同然、転び本人、古転び、古転び本人同然、類族、棄教者などの注記もあり
M331-M748		引越 (M331-M419)、剃髪 (M420-M433)、婚姻 (M434-M467)、出家 (M468-M480)、離別・剃髪など (M481-M490)、所替 (M491-M493)、「Kayoi me」 (M494-M500)、所替 (M501-M510)、養子 (M511-M531)、寺替 (M532-M536)、名替 (M537-M540)、養子・婚姻・離別・引越・名替など (M541-M748)
M749-M800	Efumi	書状、覚、帳面、類族手形など
M801-M1000 B1-B13	Efumi dei Samurai di Usuki	番号と年号 (1686～1858年) のみを記載。887-890、891-900、913-916、918-927、930-941、941-954、955-957、958-966が一まとまりの資料群と記載
B14-B19		Efumi samurai など (1866～1868年)
B20-B23		Efumi samurai など (1679～1703年)
B24-B50		侍の絵踏、宗門改帳、書状など多様

B51-B73		Ruizoku on Kayoi (1840年)。ただしB56 (書状と封筒) を除く
B74-B93		近代の断片的資料、類族の出生、死亡など
B94-B104		Atti di apostasia (棄教)
B105-182	Afumi alle pagode 寺での絵踏	1675～1802年
B183-B202	Efumi dei Samurai	1679～1813年
B203-B204		"atto di un Korobi" など
B205-B222	Ruizoku on Kayoi	番号、年号 (1840年)、地名を記載
B223-B260	Ruizoku	引越、帰還など
B261-B280	Certificati per cancellare dal go-nin-gumi 五人組からの離脱	引越、死亡など
B281-B361		キリシタン名簿、長崎などとの書状、侍の絵踏、逮捕、人数書、五人組帳など
B362-B420		大分 (B362)、竹田 (B363)、府内 (B364)、大給領 (B365)、府内 (B366-B373)、佐伯 (B374-B375)、豊前 (B376)、竹田 (B413-B420) を含む
B421-B440	Usuki han	断片的な資料で、襖から剥がし、販売者が1つにまとめた資料群と注記
B441-B459		侍の絵踏、侍のリスト、出生、死亡など
B460-469	Shitagaki per bonzi ruizoku	
B470-473		出生、死亡、届の下書きなど
B474-B507	Ruizoku	延岡、または熊本。B474-B491、B492-B497はそれぞれ一まとまりの資料群と注記
B508-B514		出生、京都への留学許可願、殉教者の子孫など
B515-B539		熊本 (肥後)。一まとまりの資料群
B540-B543		死亡、帰還など
B544-B565		旅人
B566-B620		出生、死亡、手形、剃髪、婚姻、神主の絵踏など
B621-B627	Funai ryo 府内領	
B628-B630		1850年。下岡、子川、雪浦での絵踏、改め
B631-B632	Kyoto 京都	

B633-B634		竹田
B635-B746		出生、死亡、人相書、寺名、庄屋名、病気など
B747-B773	Efumi Samurai	
B774-B941		死亡、婚姻、留学、絵踏、侍の絵踏、名替、殉教者、所替の届など

出典) A16.4.4.1.1, 4-131頁。

注) 目録で記載された頁の表題が示す範囲は、境界線上は曖昧な場合もあるが、記載内容や構成から推測し、可能な限り「内容項目」欄での区分を試みた。また、「備考欄」では、多様な内容の一部を抜粋して例示した。

主題が書かれない箇所には多様な種類の資料が並んでいることも多く、どのような主題の資料が並んでいるかについて、「備考」欄ではいくつか例を示した。「内容項目」欄を詳しくみると、「絵踏」や「類族」など、繰り返し登場する見出しもあることから、主題ごとに全資料を集約・分類してから番号付けされたわけではないとわかる。目録には、いくつかの番号ごとに、まとまりを示す横に引かれた仕切り線が多く確認される。これらの多くは、オリジナルの文書のまとまりを尊重したものと考えられ、目録内でまとまりが可視化できるように¹²⁾されていた。したがって、手順としては、手持ちの資料を順番に番号付けした後、目録を用いて本格的な内容把握を進めていったことが想起される。

ただ、とくに前半に限れば、「寺の絵踏」「棄教者」や「類族」など、同じ主題の資料が長く続く場合が多い。単に主題が共通する大きなまとまりの資料から順に番号付けしただけかもしれないが、これらの主題に対するマレガの研究上の関心の強さを示す可能性も考えられよう。逆に、番号の後半になるにつれて、こうしたまとまりは比較的小さくなる傾向にある。

その他に注目されるのは、臼杵藩以外の地域を出所とする資料が明記されたことである。「内容項目」欄(「B621-B627」や「B631-B632」)に登場する府内や京都の他にも、竹田、佐伯、豊前、肥後などの資料も散見される。冒頭頁で索引も作成されたように、マレガが文書の出所を意識し、正確に把握しようとしていた様子がうかがえる。また、他地域の資料はマレガ番号の後半に多いことから、臼杵藩の主要な資料群とは別に入手された資料である可能性も考えられる。¹³⁾

2. マレガ神父の文書管理と研究

(1) マレガ番号による整理と研究

① マレガ番号

マレガ番号が目録での資料整理の基軸であったことをすでに述べてきたが、ここでマレガ番号の意味を確認しておく。表2のように、番号は1-1000、M1-M1000、B1-B941とある。Mはイタリア語のmille (1000)、Bはbis (2倍、つまり2000) の頭文字としての省略記号であると考えられ、1～2941までの番号付けがなされた。

マレガ番号は、必ずしも1点の文書に対して1番号が付与されたとは限らない。複数文書を含むまとまりに対して付与される場合もあり、そのさいの文書数も多様である。たとえば、B75からB93では、各番号が含む文書数が比較的多い。

そのうち、B77は、1698 (元禄11) 年の「出生子書附入」と書かれた袋に収められた文書群である。マレガ目録には、「1698～1699年におけるキリスト教徒の子孫の出生」を内容とし、袋には175点の文書があることが記されている¹⁴⁾。中身の文書群については、まったく未検討というわけではなく、すべての文書が「同然」または「転び」であることを確認済であることも加筆された¹⁵⁾。

B84やB85は、さらに大きなまとまりを範囲とする。B84はA3、B85はA4 (A4.25を除く) と考えられる。A3とA4は、マレガの時代のもと思われる大型の紙箱に収納されている¹⁶⁾ (写真3)。目録では、B84は類族関



写真3 A4の外箱

係の文書330点を収める箱と説明され、A3の紙箱にも、マレガ番号の記載はないものの、同内容の説明が書かれている¹⁷⁾。同様に、目録で文書882点を数えると記されたB85も、A4の紙箱の記載、A4の箱の中にあるマレガの紙片メモの内容が目録の内容と一致する¹⁸⁾。

また、実際の資料群を確認していると、いろいろな種類の番号に出会う。これらがマレガ番号であるかについての判断には、注意が必要である。たとえば、1953（昭和28）年にバチカンに送られたA1-A21の資料群とは別に、ローマのサレジオ大学所蔵のA24には、「M」や「R」付きの資料番号が付与された資料が見られる。これらは、本稿で検討中のマレガ番号とは別の体系の資料番号と考えられる¹⁹⁾。また、各マレガ番号のなかに複数の文書が収められ、枝番号が付与されている場合もある。

では、マレガ番号は、資料中にはどのように記載されたのか。文書に直接記載する方法が一般的であるが、メモを挿入して文書に記載しない例も一部見られる²⁰⁾。また、文書に番号だけが書き込まれた場合と、スタンプが用いられた場合がある。資料群の古文書の大半は、「マレーガ」と書かれたスタンプが使用され、スタンプ内に番号が記された。一部に「マレガ. マリオ」と書かれたスタンプも使用されたが、どちらかというと古典籍に多く用いられ、スタンプ内に分冊番号が記される例が確認できる²¹⁾。また、このスタンプの場合は、スタンプ外にマレガ番号が書かれている例もあることから、このスタンプが押された時期と、マレガ番号が書かれた時期が異なる可能性も考えられる（写真4）。

いずれにせよ、資料群に見つかる番号は膨大な数にのぼる。しかし、記載ミスなどは驚くほど少ない。数字の重複などもほぼ確認されず、マレガによって正確に整理番号が付与されていたと評価できよう²²⁾。

②研究と整理

サレジオ会宣教師として1929（昭和4）年来日後、マレガは、布教地日本についての多様な研究を行った。本資料群に基づいた研究でも、学術論文や『豊後切支丹史料』（1942

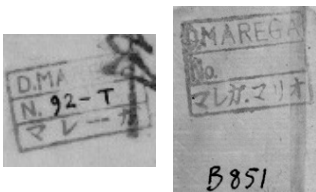


写真4 2種類のスタンプ
(A9.2.2.9.1, A1.3.2.6.1)
©2022 Biblioteca
Apostolica Vaticana

年)の刊行に至った²³⁾。資料群の整理も、自身の研究的関心と不可分に行われたはずであり、実際にマレガ番号による資料整理の様相を検討することで、マレガの研究的関心の一端を垣間見ることができる。

マレガ番号の前半(1-340番)には、番号にアルファベット1字が付記される場合がある。目録に記載された見出しや説明用語の頭文字に一致すると考えられる。マレガが番号付けを開始した当初は、資料内容を把握した上で、それを反映させた整理記号を構想していた。たとえば、1-225番には「-T」が付随する。これは、目録の主題通りTerà(寺)を示すと考えられる。同様に、226-298番にApostati(棄教者)を表す「-A」、「300-C」のCatechista、「306-R」のRegistro(帳面)、「307-shoya」(庄屋)、326-340番は再び「-A」が付与された。以上のことから、第1節で述べたように、目録前半に登場する主題は、マレガにとってのもともとの研究的関心の高さを示すものといえるかもしれない。

また、それらの主題の一つ「棄教者」の箇所では、棄教者数の集計も行われている²⁴⁾。キリシタン統制に関わる本資料群は、宣教師マレガにとって重要な意義を有する資料であったと考えられる。現地の歴史や宗教を研究する題材であるばかりでなく、近世日本でのキリスト教迫害や殉教を理解するための稀有な史料であった。その意味では、こうした棄教者の集計が目録内で行われたことも興味深い。目録の研究的な活用を示すものであり、実際、人数把握や類族・本人の分類など、目録内で資料分析を進めた痕跡は各所に確認される²⁵⁾。

さらに、マレガ資料群にはマレガ目録以外にも多くのマレガ・ドキュメントが存在する。主にイタリア語やローマ字、ときには日本語も使用されて書かれたメモや原稿、手紙などであることは述べたが、もっとも多いのが、研究や資料整理のために記したと思われるメモである。紙片に書かれて古文書に添付された場合もあれば、資料のツツミ紙などに直接記載された場合もある。

メモには資料送付や整理に関する情報も書かれたが、多くは資料内容の要約である。1~2文程度の短いものが多く、記載内容が目録の記載と近似している場合も多いことから、両者の関係性が想起される。マレガは、メモと目録という2種類のツールを用いることで、資料の個別的な把握と集約的な理解を相互に関連させながら膨大な資料群の把握に努めたものと考えられる。

(2) 整理と管理の変遷

① マレガ神父の文書管理

資料にマレガ番号が付与されたとはいえ、2941という膨大な数である。マレガはどのように整理し、管理していたのだろうか。その際に注目されるのが、Pacco（包み）またはScatola（箱）（以後、省略してPaccoのみを記載）である。

目録が収容されているA16.4には、資料管理についての紙片メモが何枚か確認される。そこでは、Paccoに番号が付与され、番号順に並べられた各Paccoに複数のマレガ番号が含まれることが記されている。表3では、これらの紙片に加えて、資料群の各所でツツミ紙などに確認されるメモ（写真5）から得られた情報をまとめた。1-51番までのPacco番号が確認され、51番はA-Gに分かれる。Paccoは、実際に資料を収容した包みや箱などの保管容器を指すと思われる、保管容器に番号をつけて整理することで、マレガ番号を容器ごとに把握・管理していた。Pacco番号の並びとマレガ番号の並びはおおむね一致し、両番号は整合的な関係にあるといえる。

ただし、ここでいう保管容器とは、古文書と同時代に作成されたツツミ紙ではない。マレガの時代のもので、複数の古文書を包む新聞紙などのツツミ紙や箱を指す。それらツツミ紙の多くには、Pacco番号か、範囲とするマレガ番号が記された。マレガは、情報を集約したメモと、各Paccoに記載された情報を

照合することで、膨大な資料群から資料を見つけ出せるようにしていた。

Paccoが資料整理の基準の一つになっていたことは、Pacco間の文書の移動という点からもわかる。

たとえば、もともとPacco 39に収容されていたB94-B104は、Pacco 3に移動された。理由は、資料内容（ここでは「棄教」）を同一とするPaccoに集約するためであった。²⁶⁾同様に、「寺の絵踏」を内容とするB137-B182はPacco 1へ、「侍の絵踏」を

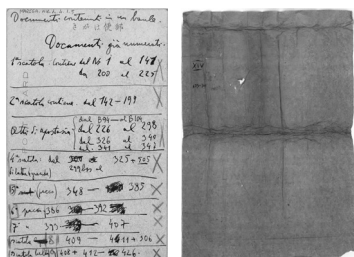


写真5 Paccoについての記載例
(A16.4.4.1.5, A8.2.0.1)

©2022 Biblioteca
Apostolica Vaticana

注) 紙片メモ（左）と、ツツミ紙に
記載されたメモ（右）の例。

表3 Pacco番号に基づいた構成

Pacco	マレガ番号	容器の形態・内容など
1	1-141, 200-225, B105-B135, B137-B182	scatola / manca il N41
2	142-199	scatola
3	226-298, 326-340, 341-347, B94-B104	棄教 (Atti di Apostasia) / Pacco
4	299bis-325, 505	pacco / プリキ缶の大きな箱 (scatola di latta grande) / Ripassato
5	348-385, M248-M266	pacco
6	386-392	pacco / 7と一まとめ
7	393-407	pacco / 6と一まとめ
8	306, 409-411	scatola di latta (プリキ缶の箱)
9	408, 412-426	赤い (綺麗な) 箱 (scatola rossa (bella))
10	427-500	宗門改帳 (shumon aratame cho) / pacco
11	501-566	宗門改帳 (shumon aratame cho) / pacco
12	567-631	まとめられた帳 (registri uniti 1698) / pacco
13	632-652	紙片、書状 (fogli, lettere) / pacco
14	653-709	寺の書状 (lettere dei Terà) / pacco
15	710-734	宗門改帳 (shumon aratame cho) / pacco
16	735-786	pacco / abolito. Libro 1942
17	781-810	pacco / libro 1943
18	811-999, M1-M89	pacco
19	M90-M200	五人組 (Go-nin-gumi)
20	M201-M204	
21	M205-M218	cartella nera
22	M219-M229	侍の家族 (Famiglie dei Samurai)
23	M230-M244	侍の家族 (Famiglie dei Samurai)
24	M245-M247	侍の家族 (Famiglie dei Samurai)
25	M248-M266	宗門改帳 (Shumon aratame cho) / Pacco 5へ
26	M277-M321	人数書 (Censimento)
27	M267-M276	金銭についての帳 (libretti) / Registri soldi
28	M322-M330	種々 (varie) / abolito

29	M331-M419	引越証明 (Certificazioni trasferimento)
30	M420-M748	類族 (Ruizoku)
31	M749-M800	書状 (Lettere)
32	M801-M848	侍の絵踏 (Efumi samurai)
33	M849-M900	侍の絵踏 (Efumi samurai)
34	M901-M941	侍の絵踏 (Efumi samurai)
35	M942-B8	侍の絵踏 (Efumi samurai)
36	B9-B20, B183-B204	侍の絵踏 (Efumi samurai)
37	B27-B50	宗門帳の断片 (Frammenti registri shumon)
38	B51-B74	類族の通いの断片 (Frammenti e Ruizoku no kayoi)
39	B75-B93, B94-B104, B105-B182, B183-B204	棄教 (Atti di Apostasia) / 寺の絵踏 (Efumi pagoda) / B94-B104がPacco 3へ / B137-B182がPacco 1へ / B183-B204がPacco 36へ
40	B223-B280, B287-B295	
41	B302-B306, B307-B308	
42	B329-B353, B353-B363	B356-B363が長持1に収容 ("nel baule 1")
43	B364-B373	
44	B374-B412	
	B412-B421	竹田領 (Takeda ryo)
45	B421-B440	
46	B441-B477	
47	B474-B617	
48	B618-B630	
	B631-B640	a parte
49	B641-B643	
50	B644-B712	
51- A ~ G	B713-B924	B713-B729 (A), B774-B780 (B), B781-B818 (C), B819-B844 (D), B845-B860 (E), B895-B909 (F), B910-B924 (G)

出典) A16.2.0, A16.4.2.2, A16.4.4.1.3, A16.4.4.1.4, A16.4.4.1.6, A16.4.4.1.7, A16.4.4.1.8,
A9.1.3.0.1, A9.1.4.0, A9.1.5.0.1, A9.1.6.0.1, A9.1.7.0.1。

内容とするB183-B204はPacco 36に移動された。マレガは、Paccoを単位に、同一の主題の資料をまとめて保管しようとしていた。

以上のように、マレガは、Paccoを単位に資料群を管理していたが、Paccoは長持に収容されて保管されたと考えられる。1953年の長持と同一のものであるかは定かではない。ただ、たとえばPacco42の一部であるB356-B363は、「長持1に」収容とされている（表3参照）。長持にも番号が付けられていたことから、複数存在したこともうかがえる。したがって、マレガによる資料整理と管理は、マレガ番号を最小単位として、その上位にPacco番号が存在し、さらにそれらが長持の中で管理されるという構造を有していた。

では、整理の時期は具体的にいつか。マレガ目録には、1943年に再確認済であるとのメモが各所に加筆されている。したがって、マレガ番号の付与と目録の基本的な記述は、1943年以前には終了していた。また、ツツミ紙として使用された新聞紙の日付を調査すると、1938年から1942年頃にかけてのものが大半であり、特に1938年次の新聞が多い²⁷⁾。先述の通り、マレガ目録の表紙に記載された年次も1938年であることから、作業はその前後の時期に開始されたことが推測される。

② 整理の変遷

以上のように、マレガによる資料整理の構造が示されたが、問題は、現存する資料群の並びと一致しないことである。また、資料群中には、現在のものとも、前述したものとも異なる整理体系の存在を示す手がかりも存在する。以下では、それらを比較したい。

まず、現在の資料群は、A1、A2、A3、…というように大きなまとまりごとに整理番号が付けられている。これが2011年にバチカン図書館で発見されたさいの並びであるが、前述の整理体系には登場しない種類の番号である。表4は、マレガ番号の並びに合わせてA1-A21を並び替えたものであるが、両者の並びに整合性を見出すことは困難である。したがって、マレガによるものか、マレガの手を離れて以降に付けられたものか定かではないが、マレガ番号の付与による整理とは時期を異にして付与された整理番号であると考えられる。

また、資料群中には、もう一つ別の整理体系を示す手がかりがある。これが、

表4 A1-A21とマレガ番号の並び

1-M244		M245-B93		B94-B924	
1-225	A9.2	M245-M247	A10.1	B94-B182	A16.7
226-299	A6.2	M248-M266	A17.3	B183-B204	A16.5
301-307	A16.4	M277-M321	A5.3	B205-B222	A11.2
309	A5.3	M331-M419	A7.4	B223-B295	A14.4
316-321	A16.4	M420-M510	A7.2	B302-B308	A16.8
326-340	A6.2	M511-M601	A7.8	B320	A16.1
341-347	A7.5	M602-M665	A7.9	B330-B353bis	A11.2
350-384	A17.3	M667-M748	A7.6	B358-B362	A16.4
387-407	A5.1	M749-M800	A7.3	B364-B373	A16.8
418-426	A16.4	M801-M848	A8.4	B377-B419	A14.6
427-500	A10.3	M949-M900	A8.5	B421-B440	A14.7
501-566	A17.1	M901-M941	A8.6	B441-B473	A14.5
567-631	A17.2	M942-M1000	A8.1	B475-B617	A14.3
632-652	A16.4	B1-B8	A8.1	B620-B630	A16.4
653-709		B9-B26	A16.5	B631-B632	A16.6
710-734		B27-B73	A11.2	B633-B639	A16.4
811-M89		B74-B76	A16.4	B641-B780	A9.1
M90-M200	A5.4	B77-B93	A15.2, A15.5, A12.5,	B781-B818	A16.4
M202	A16.4		A12.3, A12.2, A12.1,	B895-B909	A16.2
M205-M216	A8.3		A20.2, A3, A4, A19.4,	B910-B924	A9.1
M219-M229	A10.2		A15.4, A12.4, A15.3,		
M230-M244	A5.2		A12.6, A4.26, A23.2		

注) A1-A2に移動された文書は含まない。

資料群の各所に見つかる「概要カード」である。該当するマレガ番号と資料内容が厚手の紙に記された資料参照用の整理カードである。紛らわしいのは、概要カードも Pacco 番号とマレガ番号を基準に整理されていることである。表5では、概要カードのPacco番号の並びにしたがった資料群の構成を示した。概要カードの各Pacco番号が対象とするマレガ番号を確認すると、前述のPacco番号とはまったく異なる整理番号であり、マレガ番号の並びとも一致しないことがわかる。したがって、この整理体系も、マレガ番号付与の時期とは異なる

ことが推測される。また、A1-A21の並びとも一致しないことから、A1-A21の体系とも別のものということになる。

以上のように、本資料群から確認されるのは、現在に至るまで3種類の整理体系が与えられてきたということである。マレガ番号の並びとの対応という観点から考察すると、前述のPacco番号に基づく整理(表3)が最初に行われたものと考えられる。その後、どこかの時期に考案された概要カード²⁸⁾の秩序、および現在のA1-A21による構成に至ったものと考えられる。

3. 文書の移動と所在

(1) 資料群におけるマレガ番号の所在

① マレガ番号 1-225

マレガ番号の資料は、今も番号通りにオリジナルの資料群中に並んでいるのだろうか。番号の冒頭部分1-225番を一例に、文書の所在と移動を確認する。

付随する概要カードで「村人の仏教信仰を僧侶が保証する証文、生死の証明」と説明され、番号の末尾にTが付く1-225番の資料群は、A9.2に收容されている²⁹⁾。番号は、現在の資料整理の体系でA9.2.1-A9.2.25に所在するが、表6からわかるように、逆向きではあるが、おおむね資料はマレガ番号の通りに並んでいることがわかる。マレガが番号付けをした当時のままとりのまま、現在に至っているといっただろう。

しかし、一方で、いくつかの番号が抜けていることも確認できる。では、それらの番号はどこに行ったのか。また、マレガは、「抜け」資料について把握していたのか。その行方を検討する。

② 「抜け」資料の行方

手がかりになるのが、目録内で加筆された印やメモである。マレガ番号に、青、赤、黒色で色を塗ったり、丸、下線や×が書き込まれた箇所がある。これらの印に注目して検討すると「抜け」資料であることが多く、5種類が確認できる。

まず、研究で使用されるために抜き取られた資料である。たとえば、番号に

表5 概要カードに基づいた構成

Pacco	所在	カードに記載されたマレガ番号	記載内容
1	A9.2	1-225	僧侶による仏教信仰の保証、出生・死亡
2	A10.1	305-321, 378-384, 386-392, 427-500, 501-566, 567-631	農民・兵士
3	A8.1	M801-M848, M849-M900, M901-M941, M653-M709, M942-B8, M207-M212	寺院による仏教信仰の保証、キリスト教徒の子孫
4	A6.1	220-260	棄教
4	A6.2	270-277, 326-340, 278-298	棄教
5	A11.2.1	なし	出生・死亡
5	A11.2.2	51-74, 205-222	棄教者の家族の出生・死亡
5	A11.2.5.1	B27-B50	出生・死亡、棄教者の親族への異端審問、非キリスト教徒としての信仰告白
5	A11.2.4.1	B329-B353	
6	A14.1	B223-B280, B287-B295, B374-B412, B421-B440, B441-B473, B474-B617	棄教者の親族の結婚・死亡・引越・剃髪・旅行など
7	A9.1	B641-B645, B646-B712, B713-B771, B845-B894, B774-B780, B819-B844, B910-B924	棄教者の親族の結婚・死亡・引越・剃髪・旅行など
8	A7.1	M331-M419, M468-M476, M511-M531, M602-M611, M688-M748, M749-M800	棄教、棄教者の親族や子供たちの結婚・引越・剃髪・養子など
9	A11.1	M1-M89, M811-M999	棄教者の親族の埋葬に関する寺院の帳面
10	A5.4	M90-M200	五人組の誓約
11	A16.3.3	B9-B26, B183-B204	絵踏
11	A16.3.4	なし	絵踏
11	A16.3.5	B631-B632	非キリスト教徒としての誓約
11	A16.7.1	B94-B182	絵踏による非キリスト教徒としての誓約
11	A16.8.1.1	B364-B373, B302, B307, B308	絵踏

12	A16.1.1	M267, M275, B320	文書目次、日記、図面
12	A16.3.2	B895-B909	米
12	A16.4.1.1	B74-B76	
12	A16.4.2.1	B781-B818	棄教者の旅行など
12	A16.4.5.2	B362	キリスト教徒の子孫が非キリスト教徒である 事実の更新 / 大分市（府内領）
12	A16.4.6.8.3	418, B633-639	監獄での死者、絵踏 / 竹田
13	A4.1	なし	キリスト教徒の子孫の引越・剃髪など
14	A3.1	なし	絵踏、キリスト教徒とその子孫の死亡
15(12?)	A19.1	なし	
15	A19.1	M80-M82, 他2	キリスト教徒の子孫の死亡
16	A15.1	B77-B79, B87-B90	キリスト教徒、棄教者、棄教者の子孫の出生
17	A20.1	B83, B86, …	キリスト教徒の子孫の出生・結婚・離別・剃 髪
18	A2.1	なし	『豊後切支丹史料』で使用した資料
19	A1.20	なし	『続豊後切支丹史料』で使用した資料
20	A13.1	なし	剃髪・出家・引越・田畑の売却・住民リスト・ 旅行・出生・死亡
21	A21.1.4.20	なし	岡城の紋章、絵地図、募金集め
22	A21.1.4.19	なし	古装束、宗教儀式、仏教法典に関する木版の 古文書

青色が付けられた27番の資料は、A1に見つかる。これを含め、1942（昭和17）年に出版の『豊後切支丹史料』、および1946年の『続豊後切支丹史料』で使用された資料は、A1やA2に移された。³⁰⁾

2種類目は、マレガが別のPaccoに移動した例である。目録や紙片メモでは、28番が「黒のツツミ紙」と呼ばれるPacco 21に所在することが記されている。そして実際に、Pacco 21に収容されていたはずの他の資料とともに、現在ではA8.3に見つかる。ただ、この場合は、あくまでもオリジナルの資料群のPacco間での移動であるためか、目録のなかの番号に印などは付けられていない。³¹⁾

3種類目は、他所への送付である。目録では、番号に赤色で×印を付けられたものが多い。たとえば、29、32、56、66-83番はイタリアに送付された。こ

これらの資料は長らく所在が不明であったが、32番を除いて、2020（令和2）年にバチカン文書館で発見された³²⁾。また、99番は上智大学に送付されたことがメモされており、論文に寄稿した際に用いられた資料と考えられる³³⁾。一方、115番は大分合同新聞に掲載された³⁴⁾とメモがある。現在は、ローマのサレジオ大学所蔵の資料群であるA24に所在することから、新聞への掲載時にそちらに紛れてしまったのかもしれない。

4種類目として、マレガが所在不明と考えた資料がある。たとえば、41番は目録で番号に黒丸が付けられ、「見つからない。Paccoにない」とある³⁵⁾。140番も同様に、該当Paccoにないことが記された³⁶⁾。なお、現在では、140番はA24にあり、41番は前述の新出資料に含まれていた。

以上の4種類は、マレガが資料の「抜け」を認識していた場合である。一方

表6 マレガ番号1-255の所在

マレガ番号	文書所在地
1T-4T	A9.2.25
5T-8T	A9.2.24
9T-12T	A9.2.23
13T-16T	A9.2.22
17T-20T	A9.2.21
21T-24T	A9.2.20
25T, 26, 30T, 31T	A9.2.18
33T-36T	A9.2.19
37T-40T	A9.2.17
42T-46T	A9.2.16
47T-49T	A9.2.15
52T-55T	A9.2.14
57T-60T	A9.2.13
61T-65T	A9.2.12
84T-131T	A9.2.1, A9.2.2, A9.2.3
132T-139T	A9.2.5
200T-221T	A9.2.4
224T-225T	A9.2.7

で、そうした認識が確認されない資料もある。たとえば、『豊後切支丹史料』にあると書かれている141番である³⁷⁾。A1やA2にはなく、現在はA24にある。また、目録では黒い仕切り線で区切られ、一まとまりの資料群とされた142-199番も、そのうちのいくつかはA24にあるが、所在が確認できない資料が存在する。

以上のように、1-225番の例では、現在の資料群において他所で確認できるものもあれば、所在が確認できない資料も存在することがわかった。では、マレガ番号全体では、どれほどの所在不明資料があるのだろうか。

(2) 未確認資料と文書移動

① 未確認資料

表7は、今回の調査の結果、現在の資料群中に確認できなかったマレガ番号を一覧化したものである。確認できなかった理由は不明瞭なことも多いが、一部の番号について、あくまで推測の域を出ないものの、2点の可能性を考えた

い。

まず、送付資料である。マレガは、1939年にバチカン布教・民族博物館の年報である *Annali Lateranensi* 誌で論文を発表した。その際に使用した7点の資料をバチカンに送付した。これらは現在、バチカンに存在すると推測される³⁸⁾が、現時点では発見されていない。同様に、99番と320番も上智大学への送付が理由と考えられる。

一方、411番は、目録で「1635 Sashibu. Avea 1319 cristiani […]」と記述され、佐志生のキリシタン1319人と、その地域的な内訳が集計されている。同様に、409番と410番でも他地域でのキリシタン数が集計され、これら3資料が「より古い時代の帳面」であるというメモ書きとともに一緒に枠で括られている。マレガが一まとめの資料として認識していたことを示すが、409番と410番はA24に確認される。A24は、マレガが1950年に講師を務めた東京都調布市のサレジオ神学院に保存され、2005年頃にローマ・サレジオ大学に送られた資料群である。現在のバチカン図書館に至るまでの長い道のりを考慮すると、どこかの過程で411番が散逸してしまったという可能性も考えられよう。また、同様のケースとして、前述の142-199番中の未確認資料も挙げられる。

表7 未確認資料の番号

マレガ番号	未確認番号 (A1-A26)
1-200	32, 99, 142-145, 148, 150-154, 156, 158, 159, 162-165, 168-170, 172-175, 177-186, 191, 192, 196, 198, 199, 228, 299, 302-304, 309, 312, 320, 397, 398, 411, 929
M1-M1000	323, 537
B1-B941	356, 357, 360, 495, 525, 773

② 文書移動と繋がり形成

以上のように、マレガは、マレガ番号によって資料群を管理したものの、必要

に応じて文書資料を抜き取って移動させたことで、ときには資料散逸も生じた可能性が示された。最後に、マレガにとっての文書移動とその意義を考えたい。

文書移動の最たる理由の1つが、他所への送付であった。そのなかでも、ここで注目したいのはイタリアへの送付である。いわずもがな、もっとも大規模な移動は1953年の資料群（A1-A21）の送付である。しかし、マレガは、この大規模な資料群を、いきなり送りつけたわけではない。これまで見てきたように、それ以前から、いくつもの資料がイタリアに送られていたのである。

たとえば、1939年の*Annali Lateranensi*誌での論文掲載に際し、マレガが7点の資料をバチカン布教・民族博物館に送付したことはすでに述べた。その後、同年報には1949年、1950年、1961年にもマレガの論文が掲載され、1950年の寄稿の際には、中津地域の新出資料として東照神君十五ヶ条の写し（324番）を寄贈している⁴⁰⁾。その他にも、前述の2020年の新出資料である29、56、66-83番も同博物館に送付された⁴¹⁾。さらに、1948年にはマレガは教皇とも会談し、743番の「切支丹宗門之者御預帳」がローマ教皇へ献上されている⁴²⁾。マレガが研究論文と資料送付によって、バチカンおよび同博物館との関係を構築していたことがわかる。

宣教師にとって、布教地の理解や布教地との関係性の構築が現実的な課題であった一方で、本国との関係性もまた重要であったはずである。日本の史料を収集し研究したマレガにとって、収集資料の移動が、そうした関係性の構築に寄与した側面があったといえるのではないか。付言すれば、マレガが文書資料の送付に際して意識していたのは、バチカンだけでなかった可能性もある。侍の絵踏や宗門改帳である313、314、315、317番は、前述の新出資料に含まれ、現在はバチカンに存在する。しかし、目録内では、これらの資料はサレジオ会本部があったトリノ（サレジオ会博物館）に送付されたとメモされている⁴³⁾。このメモが特定の経緯を反映したものなのか、単純な間違いなのか、具体的な事情は明らかではない。しかし、少なくとも、文書移動において、自身が所属したサレジオ会への繋がり意識をうかがわせるものといえよう⁴⁴⁾。

おわりに

以上のように、本稿では、マレガ目録を手がかりに、マレガによる資料群の整理と管理を検討し、資料群に対して行われた具体的な整理の諸段階を解明することを旨とした。それによって、マレガ番号とPacco番号に基づいた資料群の整理と管理が行われ、それがマレガの具体的な研究関心にもある程度即した形で進められていたことが明らかになった。ただ、この整理体系は現在まで維持されたわけではなく、その後に行われた2種類の資料整理を経て、資料整理の形跡が複層的に残存する現資料群が成立していることが理解された。

また、資料の一部は番号付けをされた当時のまとまりから抜き取られ、他所へ移動していたことも確認された。そして、そうした文書の移動が、宣教師としてのマレガにとって、自身が帰属するサレジオ会やバチカンとの関係構築に向けて寄与していた可能性が示された。1953年の本資料群の送付も、突然にして行われたわけではなく、それ以前から文書の移動を通じたバチカンとの関係性の構築の上に実現したと考えるべきであろう。その意味で、マレガによる事例は、宣教師による布教地の理解・研究としての側面のみならず、その成果としての文書移動を活用した関係性の構築についての一側面を描写するものといえる。

ただ、本稿では、バチカン図書館所蔵の資料群のなかでも、とくにマレガ番号が付与された資料に絞って検討を進めた。これは、マレガによる資料整理を解明する目的によるものであったが、資料群の全容解明には、番号の付与されていない資料の検討、さらにはバチカン図書館以外に所蔵されている資料も含むマレガ・コレクション全体のなかに位置付ける試みも必要になってくるはずである。文書移動のさらなる状況解明も含め、今後の課題としたい。

註

- 1) 記録文書やそのまとまりの歴史的形成に関する議論については、たとえば以下を参照。
Burke, Peter, 'Commentary', *Archival Science*, 7, 2007, pp. 391-397.
- 2) バチカン図書館所蔵マレガ資料群、A1-A26。

- 3) たとえば、近世宣教師の現地適応の諸相についての近年の成果として、齋藤晃編『宣教と適応 ―グローバル・ミッションの近世』（名古屋大学出版会、2017年）。宣教師による収集の例として、林勲男「宣教師と博物学：ジョージ・ブラウンの博物収集の歴史的的位置」（『国立民族学博物館調査報告』10、1999年）、25-48頁。西欧の蒐集文化については、ジョン・エルスナー他編『蒐集』（研究社、1998年）。
- 4) “CATALOGO dei documenti nella persecuz. in Giappone. D. Marega 1938”。
- 5) “CATALOGO con i numeri dei documenti contenuti nel baule di legno semplice”. A16.4.4.0。
- 6) A1-A21が1953年に送付されたオリジナルの資料群。近年になって、バチカン図書館で別個に保管されていた資料（A22、A23）、サレジオ大学図書館所蔵の文書資料（A24）、バチカン美術館図書館の資料（A25）が追加された。
- 7) Proverbio, Delio Vania, ‘Cronologia del fondo Marega in Vaticana’（「マレガ・プロジェクト」シンポジウム in 白杵『バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力』2014年）、14頁。
- 8) 1953年の経緯については、松井洋子・佐藤孝之・松澤克行編『魅る「豊後切支丹史料」―バチカン図書館所蔵マレガ氏収集文書より』（勉誠出版、2020年）、6-9頁。シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』12号、2016年）、162頁、本書所収。
- 9) したがって番号のない資料は目録の範囲外であり、その分析は別稿に譲る。
- 10) 白杵藩以外の地域について、府内がB387、B362、B364-B373、387、B621-B627、竹田がM201、B413-B420、さらに欄外の記載として延岡がB622、豊前がB376。
- 11) 資料群の入手については、註8ヴィータ論文、160-163頁を参照。
- 12) 表2「備考」欄（「632-652」「653-668」）のような注記が目録で散見される。
- 13) 資料の追加購入については、A1やA16に確認される古書店からの購入記録の検討が必要。また、註8ヴィータ論文、および註8松井他前掲書を参照。
- 14) 目録（A16.4.4.1.1）107頁。“I nati dei discendenti cirst. del 1698-1699. Completo con sacco. 175 fogli. Ripass. tutti dozen o korobi”. B77の袋は、A15.2.0。
- 15) 異なるペンで書かれており、番号付け後後に確認されたと考えられる。
- 16) 大分市竹町四丁目に所在した一丸出張店紅屋洋服店の箱。A4の外箱も同様。
- 17) “Scatola contenente 330 doc. sui Ruizoku (discendenti di cristiani)”. A3の外箱の表面。
- 18) 目録108頁では“Scatola contenente 882 documenti seguiti i. 1716-1735”. A4の紙箱も同内容の説明があり、A4.4.1の紙片メモでも“In tutto si sono piu' 882 doc.” “Le lettere con ㊦、sono dell'era di Kyo-ho”、“1716-1735”と記載されている。また、A4の紙箱には「II」^①と書かれており、A3の紙箱が「I」の可能性が考えられる。
- 19) 目録3頁に、R1-R150の資料をローマに送付したとの記載があるが、A24の資料との関連性の検討は今後の課題である。
- 20) たとえば、B641-643、B776-779、B780、B837、B894など。
- 21) A2やA24に「日の国MAREGA」や弓を引く人のスタンプもわずかに確認される。
- 22) 数少ない記載ミスとして、M309、M356、M956、M993でMを付け忘れている。
- 23) マレガが日本で行った諸研究の詳細については、以下を参照。シルヴィオ・ヴィータ「マリオ・マレガの執筆活動とその『文脈』」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』14号、

2018年)、131-146頁。

- 24) たとえば、目録の15-17頁。
- 25) 目録3頁目で、類族資料から転びや本人を確認する方法を注記している。
- 26) A16.4.4.1.1. “messo nel pacco N: 3 con gli altri atti di apostasia”。
- 27) 1938年にマレガは『古事記』のイタリア語訳を刊行しており、新たな研究を始める時期だったのかもしれない。なお、1950年代の新聞紙もあり、複数Paccoを含む大きなまとまりを包んでいる。
- 28) 概要カードやA1-A21の秩序形成のどこかで、バチカン図書館のローラン神父 (Marie-Hyacinthe Laurent) が関与した可能性も考えられる。ラテン部門の書記官であった神父は、図書館での資料群の受入れや、2011年に図書館A書庫で見発された際の状態に整理した人物とされる。註7Proverbio論文、16頁。
- 29) A9.2.1. “Le attestazioni dei bonzi che garantiscono la fede buddistica dei paesani. La certificazione di nascita e morte”。
- 30) 27番 (A1.18.3.2.1)。他に、105、110、137、138、166、194、222、223番。
- 31) 目録5頁で28番は、“si trova nella cartella nera”。A9.2.18.1の紙片メモにも、同内容の記述がある。Pacco21に収容されていたのは、M205-M218。
- 32) 新出資料は、29、41、56、66-83、313、314、315、317、318番。バチカン文書館で見発され、現在はバチカン図書館が管理している (資料群のA26)。
- 33) 目録8頁、“dato all ‘Universita’ Sofia. Tokyo”. 3頁でも、“Alla Jochi Dai gaku: N:99, N:320”. なお、論文はMarega, Mario, “E-fumi”, *Monumenta Nipponica*, 2-1, 1939, pp. 281-286。
- 34) 目録9頁、“Pubblicato nel Godo Shinbun”。
- 35) 目録6頁、“Manca. Non c’è nel pacco”。A9.2.10も、“manca il N. 41”。A9.2.11も同内容。
- 36) 目録10頁、“Vocabulario 5 fogli”、“Manca non c’è nel pacco”。
- 37) 目録11頁、“Manca. E’ nel libro Bungo Kristan”。「見つからない」という語を消している。
- 38) Marega, Mario, ‘Memorie cristiane della regione di Oita’, *Annali Lateranensi*, 3, 1939, pp. 9-59. 掲載されたのは32、228、299、302、303、304、309番の資料。
- 39) 目録44頁。409・410番はA24.1、およびA24.2に現存する。
- 40) ‘Documenti sulla storia della chiesa in Giappone, Gli editti di persecuzione del 1619, Testi e note critiche’, *Annali Lateranensi*, 14, 1950, pp. 9-59. 目録で324番は、“I 15 artic. di Yeyasu. Spedito ad Annali Lateranensi”と説明され、現在はA.25にある。なお、註8ヴィータ論文は、バチカン布教・民族博物館で1925年に行われた布教博覧会が、マレガの収集・研究活動の原点になった可能性を指摘している。
- 41) 目録3頁。“Mandato in Italia al Museo Lateranense, per articolo. N: 29, 56, dal 66 al 83 compreso”. A9.2.10-12の紙片メモなどでも、同様の送付情報が確認できる。バチカン布教・民族博物館に送られた可能性のある資料としては、他にA25.1のB359 (五人組帳)。
- 42) A23.8 (vat.estr.or.48)。
- 43) 目録19頁、“inviato al museo Salesiano Torino”。送付に至る経緯は不明だが、最終的に、これらの資料はチマッティ神父によってイタリアへ運ばれ、バチカンにたどり着いたと考えられる。
- 44) 実際、註8ヴィータ論文では、マレガがトリノに「もの」を送付していたことを指摘している。また、トリノのサレジオ会関連施設には、現在、マレガが送付したと考えられるものも含めて日本関係資料が保存されている。